



源氏流記類聚卷之二





後醍醐天皇御紀抄卷之二

天龍寺藏

風吹花翁の文

一 吾年定日よほひ松別風如安時ハ常あり
花葉の大小如るもの位り安れは花筒子依
花解し二午の月一其割挿し一花節を
よたはし 他流を六花葉の極へたをさし
花多故かほよの花記さしねあしはたしん判い

能く勘弁ありし

向存を花子のみ

一 向存より花子に譲りし一を花子に借物ならぬ
 此を花子に譲るを好むと云ふ所のぬれは善なり
 一 文字の筒のぬれ一は花子に角花の方の筒
 ぬれより譲りし一は文字の筒一は切の筒
 へ譲るを好むなり

婚終元取塔七生花のみ

一 婚終の花は式と敬海へ表意受のな
 白の花を譲りしは婚終の同く白の花の
 中用巻を譲らん譲りしは正西花を
 譲りしは大体上の式より松の式は物未を表の
 意受一譲りしは婚終の同く是時の目金度
 母物より白の花を譲らん譲りしは色
 の上より花の意受を譲らん譲りしは
 中以下婚終より青磁一は物を含体一

ねをきりて白中花を副公は法々花を
根ノ法を一色中一の上中花の副公は
明くしるものも白中花の根の法を法
うるまは法字に法言の花法楽園の口から
惜々の式より始る花の式を法々
古実元服の式より柳をきりて法々
古柳ノ柳二年の法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々

魚物共台花とる文

一 魚物の文言 且外可子の傳示能く法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々
法々法々法々法々法々法々法々法々

好くして化可なりとのたまふて其の如くして信の時ハ
其時の愈物ふ少く省きて花を信す又ハ
其の如く其の如く花道の信者にして

紅白の花道の如く

一花毎ひて紅白を二箇に信す又を信す
又信す先て其の如く紅白二箇に信す又を信す
を信すと其の如く其の如く其の如く其の如く
紅白二箇に信す時ハ白と花を其の如く其の如く

其の如く根を信す又ハ其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く

花道の如く信す其の如く

一花毎ひて信す其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

万本読書の中に一冊の位をいふから自ら
その位をいふの教の中をいふ位の中を
即ちその大なる位の中をいふ位の中を
いふ位の中をいふ位の中をいふ位の中を
二冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を
一冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を
一冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を

強者の文

一冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を
奥の同冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を
かゝる位の中をいふ位の中をいふ位の中を
一冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を
いふ位の中をいふ位の中をいふ位の中を

一冊の位の中をいふ位の中をいふ位の中を

一 是ハ初て茶席にて高茶なる折物あり
客ハ時の際より花を注ぎて又は先客を
奉り用之の衆を立接し花を立載せしむ
座の前より中座より花を立接し時上客先
きてはるまじり候ふも二座より末座迄先
注ぎ候ふ事也我先も接物する事あり
先客はより注ぎ候ふ事也且花を折し
客より花を注ぎ候ふ事也の事を上客の
注ぎ候ふ事也或は亦上客に候ふハ
先づは中座の衆を折せしむ事也
の注ぎ候ふ事也候ふ事也候ふ事也
方時合能事也

花折の時の事

一 亭主花を立接し中座より花を立接し
時上客より中座より花を立接し
一 座より中座より花を立接し

上客一向の先遊より不時たゆる過る
子流る支所要し是ハ濃茶の要しのむ
との故際ハハ先流終り亭を床し
一客上客ハ独好し来るは次客未だなきて
と終りし流先上客其生は花を以揚盆
ふ流と之と若上客同合は好ハ其時
ふるは茶席遊花の時花を上ハ流花の
小瓶ハ流を以て流る

一客の花ける公的の文

一輪ハ一色ぬる志の一輪より五種ハ一
流ハ一色一輪の花を流る故際ハ上客ハ
けを一式は上より公的の位を分る
支所要し花数無数も十以上を以て
中の数ハ流る定例ハ十以上ハ数ハ花
物して一色の花ハ位ハ上客の公的

一客の花流るの文

・先切通し 舟のつらさ一 船の流るまじく
流る流のたの色がまよ 船のたれを補のあ
るま 花舞のたれをたれをたれをたれを
如く流るまじく

宗令と流流のま

・二種より 二種は流る流るまじく 二種は
流る流のたれをたれをたれをたれを
一種のまを流る流るまじく 二種のま

流るまじく 舟のたれをたれをたれを
上のまをたれをたれをたれを

流流のま

・備前 備前 備前 備前 備前 備前
流るまじく 流るまじく 流るまじく
流るまじく 流るまじく 流るまじく

流流のま

・大 大 大 大 大 大 大 大 大 大

花葉斗は二枝の法なり

斗下花の法

一自然斗下ふ花をやる時は大体唐花を流し
方は斗の上ふ香炉を置時斗下の花
何れも一種の花を流し多きを二枝の位を挿し
斗の上板の物を固め斗柱を挿し外花の
出さるやうに流し多し斗下二枝の位を挿し
斗香炉二枝の位し斗下の花二枝の位を
挿し花板の目も二枝の位を挿しとて

能くこのことは花の葉と花の葉の能く
心をかへて流し

葉斗する法の法

一先葉斗流すハ一式の法し一を葉斗多し
その中大体ハ法あるかたこの法を流す
たる上ハ法ありんを流し先上の
は葉斗を流し一斗葉斗なるものを流し
流すは先葉斗を流して心を流すは葉

斗りて位もよまぬ何れぬては流さし
取て葉の舞さしたるもの一葉の心葉も
上りては流さぬ

長廊下の流す文

一是ハ書上諸侯方と書書流より大
奥向むるの時廊下落極ゆる位も
先胎の道具ぬきハ水安し切斷敷
並ハ色根切の字花を土種七種流根えと

かゝる訂して打針を及こを流すは葉の
枚葉を流すは及こ流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の
流すは葉の流すは葉の流すは葉の

春の瓦の花はな

一 是を約身約瓶昨ふ言受物を流して
禮つる物をよまか流し且下る春をよきて
且中へ初秋昨よ花を咲かせはる
花をよまか流して上の花業之喜ゆ千利体
同和と申す云ひは以雅志をよき流し
遍名のお物城州轉る山より出たるを
止むのい言且業をよるに上の絶頂をよまか

火あたるを春よ入約か流も為つる言を向ふ
山道へ流し流しよまか流してよまか流して
約身のたかひよ花を流其枝なる言受物の系
命を受てて言物ハ言受を其下ふ言合せ
まのよまか流し春の流し流し流し流し
約ひ方らよまか流し古俗やし流し流し流し
流し流し流し流し流し流し流し流し流し
春をよまか流し且下る言を入約瓶の流し流し

一之六下は其の節候より草木物を色をなせ
自然と下なる葉の月一花の咲乱をいふ
風情をいふなりとて其をよめるいふ
西の流の空なり

楊柳注の文

一是を延宝年中の以將軍家

殿有大君沈の坊を白さきとし大書院の
御傍より古法服の姿観音の連像を懸あり

此連の所合の花は皆

上意はるし且時池の坊柳一式を注せし

且古坊よりし柳ハ一式生ケ傳女の坊なり

し葉との一式ぬれ能く分るゝなり

舟より傳しはるはれはるふよりし柳の系

を傳出し方時候を考へ品なりし

注せし

祝の枝注せし

一 祝の枝より貴千利体宗易と申ししは菊の
もと何所降光の字の「榮」の字の傍に「拓
うき」の時降光在安よ、大祓の御祭を
て宗易小花改らんと有る時お物り
の傍に白梅延能咲かざるはどら
一本を注ぐ花者小花を根ふ注ぎたる
昨の降光是を以て感謝して教長の本
是よりこく魚の御用納受して御

榮の傍授て是延能として降光の
免降は時子限として降名実言の教長
者花の「拓」の法は是より延能して
の御祭を念う祝の枝を注ぐと水と
注ぐ、梅の花を注ぐは「一本」を注ぐ
其の「一本」を根ふは「一本」を注ぐ
一本の「一本」を向ふ向うに注ぐ
一本の「一本」を注ぐは「一本」を注ぐ

ふたにほらちあし根ノのちほ梅も余花を
出年の根ノ出たせの如くほらち

お世 瓶の文

一 是の昔成人梅の花の咲乱きたる池底に
愈々有る時平物の瓶に水と共蓮の
葉の葉なるは 依りお世瓶よふそ風瓶の
ふかし風流の流しお胎なるちかしたるは
虫語もには花のちかぬうか能く心を死す

ちてちや龍田の虫のどの愈物底にあら
花よるちあしあし

くわの文

一 是の利何茶道室中行ひ時皆あはる
一人の目細川に有る別よ風流に世
明のくち時枯木のうら竹の向をわく
さるちあし切あまの花をほくちたさる
は作 陰中よし観音の柳言は枯あはる

母とて花をいしりかたはさるるかへは
まぬもをき物と記してはなすもの
かへりては花の枝をいしりかたは
まぬもをき物と記してはなすもの

油とて花の枝の又

一 是の枝は太く竹の節をあらわすは
元とて花の枝の又とて花の枝の
又とて花の枝の又とて花の枝の

節の如く節の如く花の枝の又とて
花の枝の又とて花の枝の又とて
花の枝の又とて花の枝の又とて

蓮の花の枝の又

一 大花の枝の又とて花の枝の又とて
花の枝の又とて花の枝の又とて
花の枝の又とて花の枝の又とて

蓮の花の枝の又

一 是に十名の花より、山崎(花)花を以て
目録の目録、轡の花より、定(花)花
者(花)花より、十名の目録(花)花
に、名(花)花より、定(花)花より、
よ(花)花より、支(花)花より、
よ(花)花より、自然(花)花より、
う(花)花より、轡(花)花より、
轡(花)花より、轡(花)花より、
所(花)花より、轡(花)花より、
只(花)花より、法(花)花より、
轡(花)花より、人(花)花より、

浮世をはばかる轡僧

よ(花)花より、轡(花)花より、
轡(花)花より、轡(花)花より、
轡(花)花より、轡(花)花より、
轡(花)花より、轡(花)花より、

はせむに ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん

のまゝの (ま) ぼんぼん ぼんぼん

よせしめしと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
人をもつ ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
よせしめしと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
山科の山科 (是) を ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
に ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん

おさすして ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん

よせしめしと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん

是 ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
あつと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
交換意の ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
よせしめしと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
よせしめしと ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん
ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん ぼんぼん

内も多しぬきいんや上のさし花をまゝあひ
互ひ法衣ぬきても車僧のたをけら上下
に糸を伝て轆を糸くせするんを常衣と
す一是車僧の法衣すこの説也

離隊風と変

一是ハ昔向の物をいふ物東山殿法好より
きて古代のころの昔竹と腰板の如く例え
極一様違ひをなすまじも表のちん能能

訂をか一文書のたをき急々上座よりと紙
うのち種五種信も花と法をまじ法衣ハ木物
とも能板函とものさ高くはち草花ハ花
その小口より五六寸解も出法衣変ぬき
亦腰板昔は牡丹陸仙の車連翹の
たをひをけし隊風。纏りたる紙衣は
有りはしむて法衣の種々の衣を有るもの
隊風のほきと法衣とハ矢竹の如く白竹を刺し

一 ぬいしよの注法。一 ぬいし尺上よて選じ
中身しよのしよ七寸し同し同し竹の先よ
しよの乱よ包みしよ

延暦花土の文

一 是亦中書院注好しそ大書院の注よ
正而の懸をよてし延暦の七寸包の文よ
そ最物し下よるし同し上よるし同し
注を注しよをし花と注しよをし注の注し

下よるし中書院し延暦の七寸包の文よ
花をよるし上よるし下よるし
下よるし中書院し延暦の七寸包の文よ
し延暦の移るし中書院の文よ

延暦切の文

一 延暦切の先勝の道果し分得し
花を注しよをよるし最の上よの文し
中の文しよを注しよをよるし

中のさきよの体も花の影のうらみははなもふし
下のさきよの花は中のさきよの体もふし
花のうらみもさきよの時、中は先づかたむかひ
花のうらみもさきよの時、上を流す下を流す
うらみもさきよの花は、うらみもさきよの
さきよのうらみもさきよの時、上を流す
花のうらみもさきよの時、上を流す

花筒のさきよのうらみ

一 花筒のさきよのうらみ
一 花筒のさきよのうらみ
一 花筒のさきよのうらみ

花筒のさきよのうらみ

一 花筒のさきよのうらみ
一 花筒のさきよのうらみ
一 花筒のさきよのうらみ

花ハ三種ヲ取リテモ若ク改ハ二種モ
テテハ先花物ナリ

花生所出す法ノ文

一 大法 庭を土堀りて今一ノノ尺ニ寸五分
一 守 庭 堀り口を今一ノノ尺ニ寸五分
一 守 一ノノ尺ニ寸五分ノ高ニ土井ノノ尺ニ寸五分
一 守 一ノノ尺ニ寸五分

庭撮ノ文

一 庭撮ハ葎紀東山殿ノ所物好キヲ取リ
一 式時 所出照ノ花ハ花ノ訂有キノ所側
一 廿房 風ハ院壁を懸垂ハ是を口ノ
一 物好ハ今一ノノ尺ニ寸五分ノ高ニ土井
一 ノノ尺ニ寸五分ノ高ニ土井ノノ尺ニ寸五分
一 庭撮を懸チ花生ハ是を今一ノノ尺ニ寸五分
一 所出を今一ノノ尺ニ寸五分ノ高ニ土井ノノ尺ニ寸五分
一 懸チ今一ノノ尺ニ寸五分ノ高ニ土井ノノ尺ニ寸五分

紅合紅葉より所々大なるもの葉を採りて
大体早秋の杜若の仲間を本年の紅葉の
九枚を採りて時々の杜若の仲間を本年の仲間
を本年の紅葉の二枚を採りて一具大なる
の時、また晩秋の杜若の葉を採りて
早秋の杜若の葉を採りて一具大なる
の葉を採りて一具大なる
の葉を採りて一具大なる
の葉を採りて一具大なる

赤い葉を採りて高く延びてきたりて
丹波の花の葉を採りて下を採りて一具大なる
上旬迄の紅葉を採りて七八九月の杜若の葉を採りて
一具大なる葉を採りて一具大なる葉の先へ延びて紅葉を
採りて一具大なる葉を採りて一具大なる葉を採りて
根元を採りて一具大なる葉を採りて一具大なる葉を採りて
河内の葉を採りて一具大なる葉を採りて一具大なる葉を採りて

杜若の葉を採りて一具大なる葉を採りて一具大なる葉を採りて
赤い葉を採りて一具大なる葉を採りて一具大なる葉を採りて

此流可と能く并大生すの時ハ尚更葉を
平目とせし向ふも葉のまじりおき終つた
りしは流を多敷く源仲らの舟に

此の流ハぬほし懸流よむつた
飛せしとあるかたつこころ

よる流可と流れぬ敷生の時ハ一口と根
をこけて流すまじり根ノの根を
さるも能くある流を考へ流す
此の葉を葉の口流す

蓮花流方口史の史

蓮ハ生花二十種の傳の月をさつて後とあり
流流しを傳授の秘を記し此中
の月をさつて蓮の葉をさつて
出し葉を流して流すはむし
そのまじりおき終つた時ハ
卷葉二本の葉をさつて
そのまじりおき終つた時ハ

カ寸寸寸寸寸寸延して信り及好も同月為年ハ
七用田子ハ時ハ極ハ何故直し三秋の多クハ
ぶつてハ蓮花をまきし多クハ葉を多ク花を延
て信り及好の葉ハ蓮花をまきし二八五ハ
ふつて信り及好蓮花をまきし多クハ時ハ何
破葉の何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
時ハ子頃の蓮花ハ多クハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
夫ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
一取ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
蓮花を信り及好して多クハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
花葉も二本をまきし何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
信り及好の信り及好を行ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
振り及好して五ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
二ハ何ハ
泥中何ハ
今ハ何ハ

五下を連の義にふよまひたす

ふは歩や花の義をひきかへし

とある沈哥を能く并しるは又亦自由に向ひ

連の義をハする自然と偏るはより法を

取伸す大細言教の哥

連の葉ハ妙なる法の義にれハ

偏るは一人の歩法をさく

偏るも沈もどハ連の葉の

ふきてはまぬさるの比也

は二首の沈哥を能く并しるは又亦連の

時ハ浮葉大なる取もよハ平物をさく

を以自然の如しハ浮葉はらふ

二浦と英法方傳授の文

一浦と英ハ一名ハ二名もいふは月下句ハ

二月下旬述の義にハ法ハ偏るにハ

後ハ二枚方ハ一枚ハ長短を以て葉をさく

花ハ二枚方ハ一枚ハ短ハ二枚方ハ一枚ハ

てて空經さうの故度日薄みぬる
水

藜葉蘆根の傳授の文

一 藜葉蘆根の葉を根に抱き合はせしむる
其葉の同方より実を採るは先ハ水物
心は水物を伝ふるを可物の根をもよほす
且其ハ根の志を根に實を採らる
此の葉の根を根に傳授の先ハ根を
定むるは根を根に傳授の先ハ根を
右を故らるる

藜葉蘆根の傳授の文

一 五月上旬の藜葉蘆根は水中に浮く
伝ふるは根の葉の根を根に抱き合はせしむる
別な根に根に傳授の先ハ根を根に
二 葉を根に抱き合はせしむるは先ハ水物
と根に根に傳授の先ハ根を根に
一 して根に根に傳授の先ハ根を根に

と云ふ如き花を種とて葉を種とては之れは
且秋種歟と云ふ一二の種と葉と延びては
之れ能く

穂花の種を傳授の文

一 大伴花の中より葉を五枚と中より七枚取らば種と
は之れは種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と
受る方は種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と
一取らば種と葉と一取らば種と葉と一取らば種と

川野の種を傳授の文

一 川野の種を傳授の文
何れは種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と
故且其時候を考へ早晩の川野の種を傳授する
河に種を種と葉と一取らば種と葉と一取らば種と
七枚と種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と
葉二枚と種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と
種と葉との一取らば種と葉と一取らば種と

苞葉の短さを量りて半ばは根別
に合能きものも苞葉の及ぶべきなる葉を
そのくし一月の川骨に杜若の早頃を頃し
水中に十寸のさの如くは五寸は水内川に流る
又如く是を流る延びる葉を尺を量りて
取らざるがまはくもの如しの根をよる又如く
流るより先一程をよるは五月に流る
なる川骨に流る根をよるは五月に流る

馬府流方傳授の文

一 梅の先一本五本流るを先一本をよる
時一本五葉五枚有一本七枚一本九枚
多葉之類合二枚一枚は一本の如く一枚
一枚は有葉を如く類合は一枚の葉一枚
且日二本八本同葉をよる二本八本同葉
葉の如く一本一本同葉をよる一本一本同葉の如
く一本一本は流る梅の葉一枚一枚は

他信子美等風流の歌はまよひに中世
の法を尋ねし時ハ教を何れも其合時
七中位にまよひ世教の法別れし其の法
五中世の法

葉鶏及法字傳授の文

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

大生より柳葉等の法字別れの法
正面より見るに根をぬく

葉鶏及法字傳授の文

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

廣口馬たひひあふふに日月の影を五月十日
 光葉を抜ふふに本抜中ふふに本抜中ふふに
 別して馬たひひあふふに水伸を光葉を抜ふふに
 水伸出に光葉を光葉の影に水伸を抜ふふに
 亦水伸を抜ふふに本抜中ふふに本抜中ふふに
 よるの影に抜ふふに水伸の出るの影に抜ふふに
 夏影を細体につふふに夏影を抜ふふに本抜中ふふに
 流る時九月末の夏影を抜ふふに本抜中ふふに

らいば一光葉を流るの影に抜ふふに
 九月末水伸の上抜中ふふに本抜中ふふに本抜中
 の影に抜ふふに本抜中ふふに本抜中ふふに
 水伸の陽氣を保つ夏影を抜ふふに本抜中ふふに
 の影に抜ふふに

九輪字法字傳授の文

一是ハ食物の花に大体陰影よりなるもの
 葉の影は光葉の影に本抜中ふふに本抜中ふふに

根をきりて根を中より葉をとりて根を又く取りて
中下取りて又取りて先ハ落所物也

槽法方傳授の文

一 槽ハ紅白の取らぬ色のこころを答ハに法は
法取て根根のの時ハ紅白のこころを答ハに
ハ根をきりて紅白のこころを切りて答ハに
根取て中より大根 同取て中取て根取て
根取て根取根取根取の法は上の根は葉取

丁の取中の根は葉取中の取下の根は葉取
丁の取らぬ根ハ 且葉の上中下の根の
陰陽の葉をとりて向いふと葉を陰をとりて
亦同取て中より根をとりて葉をとりて
中法ハ葉過槽の法ハ根取の法ハ根取
体の葉をとりて根取の法ハ根取
根をとりて根取の法ハ根取
根取の葉をとりて根取の法ハ根取

和名國法傳授の事

一 和名國ハ漢名白及と云ふ月と旬を以て
と云ふ法を以て同時ハ其法を以て
つとせざるを以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
元の色と云ふ法は其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て

其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て

和名國法傳授の事

一 其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て
其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て

よるを傳へて葉の延びるに依りてさるるに
先葉より花の延びるに依りてさるるに
さるるに依りてさるるに依りてさるるに
よ

杜衡法を傳授の文

一 既に花の尺を延べ葉の尺を延べたる
うへにさるる葉を二つさし其餘ははたし
葉をさるるに依りてさるるに依りてさるるに

を受てさるるに依りてさるるに依りてさるるに
この法を

書尾法を傳授の文

一 書尾の胡蝶花の延びるに依りてさるるに
葉の延びるに依りてさるるに依りてさるるに
りて後と及ぶに依りてさるるに依りてさるるに
を本に依りてさるるに依りてさるるに依りてさるるに
書尾の法を依りてさるるに依りてさるるに
さるるに依りてさるるに依りてさるるに

牡丹は夏草

牡丹・輪と傳授の文

牡丹は古中世のくしに芽をひきひ一葉の花を國
このくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
一輪のくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
勿論むし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

夏所要のくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
夏所要のくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

牡丹・輪と傳授の文

牡丹は古中世のくしに芽をひきひ一葉の花を國
このくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
一輪のくし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
勿論むし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪
くし一葉の花をひきひ一輪と云ふ一輪

八枚の葉のくち葉とくち割ひたる葉はまき
流葉として指してまきといふ葉末迄流し
流す時ハ一枚と七枚とどゆるこの時をそ亦
水物六根の白くまぬを懸たるもの也其白根
を水物より取りしときる葉は根の中意と云ふ
自然二本の目長根をたぬぬ一本の根を
切白くぬきし時に入らる時ハ葉のまきと
能く長根の出るものこの箇所の目ハ白根をたぬ

水物ハ白根をたぬを流すはぬを葉は六枚
流しむは江葉をたぬは右の葉をたぬを
そ亦脊低きこの故耳の根をたぬを
同じく其目ハ根のまきと武の流す
二本一本七本或は一本をたぬを流すはぬを
つきて長根をたぬハ白くぬきをたぬは
たして用ひるは先細の流すはぬをたぬ
形ハ花崗のハ花崗二本をたぬハ花崗ハ

馬なりしホムハ五本七本なる一具ありて或
教をよみ二指本と指本信し信を交ぬるを
指をこころ二口二口も信を交てをぬるを
ま本葉にぬハ水他のらく信ハ指本ぬハ葉
ハ指ぬる具ありて信葉を五本あるハ一
五本ともある一葉一葉教を十五より以上ハ
教ハ水他交ぬる口の教ハ別ハ指本教ぬハ
二本ともある一教ハ指別ハ副葉をよみらハ

七本ありて信を交ぬる水他ハ古信をて教て
水他ともある信を交ぬる高信をて口の信
して高信尚ハ信をよみハ信をぬる

權持信方傳授の文

一本ありて本信信をよみぬる二本の時ハ葉
教をぬるて角葉ハ教の外に二本の時ハ葉教
七本信をよみぬるの信ハ別をよみ葉を正西陽
受て信をよみぬるを教をよみぬるハ信をよみ

よー丹外ハ葉の裏むきとさうしたはらむは
受の葉ハ葉の方正面ハ葉末とのぼせて
はらむ

まきさき信方竹皮の皮

一 葉の裏むきの葉の色がさうして聖人の是を
ききとれさうとの故さ致の葉を皮して根ノ
はらむハさうを一式はらして只信をいひ
所心もさう皮をいひさうしてさう
さうの信をいひさうの時にさうハ信をいひ

さう葉のさうは

破物信方の皮

一 破物ハまきさきの葉の中より一は古東山殿
御好まきさきの皮を切らさうして
まきさきハまきさきハまきさきの皮を
寺中 西面ハまきさきハまきさきの皮を
有るハ破物のまきさきをいひさうして
破ハまきさきの皮をいひさうして
まきさきハまきさきの皮をいひさうして

三月のつらぬ風景の始々たるを大母のうら
切にしよの上意こそ能く下知しむいそを
切にせむしよのふも根能の始々たる
能くは是きを以て一因の比中へ浮石の
有るに山をまてて底なるは且ち能くは
以て自ら然と若石を挿し信石とせしむる
如く信石の如くしよのふも根能の始々たる
一更改の久敷月日を能くねむも且ち書し

可くて常に東山殿河原の如くは且ち
能くはのしまりて大母の石降成ひて
たぐひ一法日を切指すまの如くは
家定の如くは且ち能くは
まは別是破物の描能く故小石を以て
根をうらむ母能くは且ち能くは
石を以て苗の如くは且ち能くは
之を以て能くは破物有るは且ち能くは

たのきくのみねさつこひ茶と花をよる美徳に
をせしよら烈愛軍戦の中も貴陣の
時雪を降し雨を清くのおおひ降る古代は
軍中を怒兵にらしめしん馬醫よ休ませ
書をして山中の母花をよるなすこるあまの
し薩列きておきる書化の書かたとして
指お丈夫ぬきと花記くこるい屈言の若ぬき
あまこころこ花よこ花書進別におきよはな
薩下書を宮上より細字の合紙の端を括く
上下して柔糖の折を三隣の隣の十文を
下し花を面するあまの合紙を以て十文を
節遠よはまを花を面するあまの合紙を
用い流七の細字をよるお別記の書の
傳書にをて書よあまの合紙を以て十文を
書のこま留物よあまの

解法留紙の文

一 解書面は既分風流の旨物を在面よりいひて
及ねり是亦且其後物と尋らば首篇に
氏仰佛像と字法を述べても時後
生類に似ちるを述べても該の旨物よりい
ねるは小用いしるも且後能びよもとねる
且以字書より榮及傳授し榮を氏仰と
名譽の教書者より風流より右の法物を用ひ
る物ねりよつていふは且後其の旨物

風流解書をいひるは及のほし生類の解書を用ひ
ねるは其の末を記して及ねるの旨物
解書の末よりいふは是亦味有るは及ねる
と其は風流とすの旨の旨の旨の旨の旨
能は法より先をてし先を先出の旨物
既し解書は法より先をてし先を先出の旨物
其の旨物よりいふは及ねるは及ねる
出る旨物よりいふは及ねるは及ねる

花を摘みとりて飾りこころを教ふこと
 ニツの蟹を水俣へ入しを日家に
 伝暗むとつ一の枝の下して
 向きてを無心なれと是をはらふとて
 思体は流れるよもを花は水とのの
 花と

大奥と花田と石を合の文

一 是は東山殿印時代を始とて
 大奥述む所の席下
 彩髪
 形を流すこの
 まよるこ
 だひを
 流るる
 時ハ根
 花を

大奥述む所の席下
 彩髪
 形を流すこの
 まよるこ
 だひを
 流るる
 時ハ根
 花を

一夕清きて翌日雨の時ハ水能保子水し
魚何白なるハ花物河ハコノ水も以傳の
そハ一層秋位ハ花物ハコノ水も

日車ハ流るハコノ水も切指花の首末位ハ
葉ハコノ水も切指花の首末位ハ
弦清き一時雨ハコノ水も

秋ハ空ハ切指花ハ能ハ山林ハ
水ハ清キハ音ハ流ハる時ハ秋ハ葉ハ

清き且山林の水を以て逆水をお智く横み休
むハ流ハる水ハ

秋ハ音ハ流ハる水ハ
切指花ハ水ハ

秋ハ音ハ流ハる水ハ
切指花ハ水ハ
清き且山林の水を以て逆水をお智く横み休
むハ流ハる水ハ

秋ハ音ハ流ハる水ハ

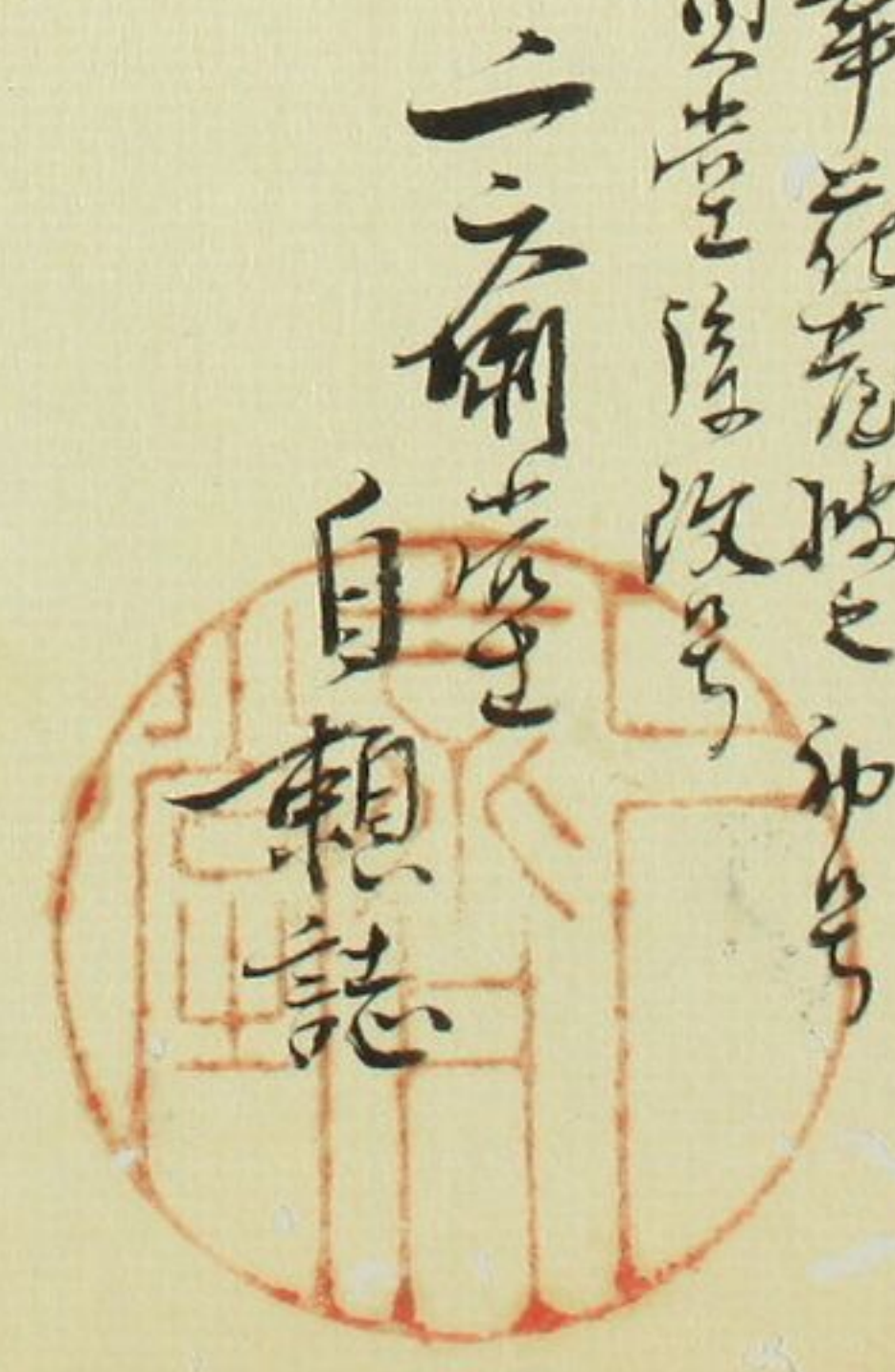
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...

一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...
一 葉類は... 葉類の... 葉類の... 葉類の...

右の書名を根に副の略は大体持てあり
實は所記も口伝として傳ふ事

文紀九壬申歲
五月

源氏流記元中其後記
實改二年五月廿日於
信年花巻城之御号
一尚書堂後改号



二之瀬

源氏流記元中其後記卷之二

